東洋哲学研究所が明年、創立50周年を迎えられることは、ことのほか喜ばしいことであり、心よりお祝い申し上げます。明年はゲーテ没後180年になる記念の年でもあるからです。ゲーテは「人生は前向きに生きられるべきものである」と信じていましたが、しかし人生は振り返ることによってはじめて理解されることも事実です。こう申しますのは、貴研究所が私に多くの聴衆の前で講演する機会を与えて下さったことを、

ゲーテは「自然が死後の新たな存在を可能にするはずである」という信念と、この慈悲の行為とを結びつけています。ゲーテは概して生命を最高善と理解していましたが、最高善とは無限の力をもつ自然から私達が授かったものです。自然に対し、生命を私達に与えてくれた存在に対して、どうしても感謝せざるをえないという必然性を彼は感じていました。その信念は次の言葉に集約されています。「生命が感謝にふさわしいもの

ゲーテと仏教哲学——その現代性

マンフレート・オステン

となつてはじめて、生命は価値をもつ」

いま感謝の念を抱きながら想い出しているからです。

そのとき私は、ゲーテの思想と仏教哲学の現代性・普遍性とを結び収束点について話しました。振り返ってみますと、ゲーテは生老病死という仏教の中心的思想を視野に入れて考えていたのではないか、また苦悩を歓喜へ、死を生へと転換しようとしていたのではないか、即ち苦悩と死を慈悲の行為へと転換しようとしていたのではないかと思えてなりません。そのさいゲ

ゲーテのこうした考えと仏教思想は、今日においても十分な意義をもっていると思っております。このような思想が、節度と創造に対する畏敬という新しい文化として実現したときにのみ、私達の地球を破壊から守ることが可能ではないでしょうか。貴研究所のますますの発展をお祈り申し上げます。

(Manfred Osten / ワイマル・ゲーテ協会顧問、アレクサンダー・フンボルト財団元事務総長)